天文学の裏方さん

名大空電研の巻

東西六百米，南北三百米，一面に雑草が生茂り，その中より松や灌木が頭を出している．それらのない所が道路や観測室や庁舎である．この中の住人は，雉，野兎，鼬，もぐら，野良犬，鳩，その他の小鳥たち，へび，蜥蜴，それと人間である．梅雨明けの空電を訪れた人は，身の丈程にのびた雑草の生きのよさに驚嘆するであろう．それらの葉は，夏の陽にきらきらと輝いている．植物を，これだけ立派に育てることの出来る人物は，恐らく日本中どこにもいまい．萩，すすき，虎杖（いたどり），その他名前を思い出すのも忌々しいほどだ．

たしかに七，八年前までは虎杖全盛時代であったのが，不思議なことに，いつのまにか，萩にその王座を取って替わられてしまった．

草いきれが空電を包む．蚊と，へびと，蜥蜴の，天下である．昼下がり，空電のメインストリートのプラタナスの涼しい木蔭で，青大将が昼寝をしているのが見られる．そのころ，人間である観測係は，真昼間であるというのに非常識な蚊の襲撃と，暑さに悩まされながらとびまわっているのだ．3750 メガヘルツ干渉計が観測を開始したのも，たしかにこの季節であった．レコーダーを見て，首をかしげた．加算側の記録はちゃんと出ているのに，掛算側は，なんとも理解にくるしむ．

掛算であるから干渉パターンが，隣合って互違いに出てこなければならないのに，無茶苦茶なカーブが出てくるのだ．しかし，まもなくその原因が判明した．干渉計の上を，断れ雲が通過しているのだ．お日さまが，照ったり，照らなかったり，そのたびに，導波管が熱膨脹で延びたり，縮ぢんだり．位相に弱い掛算干渉計の欠点をつかれたのだ．このような事も，今は技術的に克服した．この頃になると，空電の片隅で，面白い植物の活動を見ることが出来る．この雑草の大きな絨氈は，東西 600 米で，3 米以上の傾斜を持っている．

そこで雨水は，必然的に低い方に流れて，そこに湿地に似たものをつくる．そこに小いさな食虫植物が育つのだ．ネバネバした透明な水飴のような液をつけた毛氈苔は，深い小豆色に輝いている．苔のくせにあたかも，チョウチンアンコウのチョウチンのように，細い茎の先に，赤い花に似た，奇妙なものをつけている．もう一種類は，白い小さな花と毛氈苔と同じような液をつけた緑色の触手を持った，高さ約 30 センチ位の可愛い草である．そこには，哀れな蚋（ぶよ），蟻，その他の小昆虫が捕えられている．空電の秋は素晴しい．萩が一つ一つ見ると上品な，小さな，赤紫の花を一枝一枝念入りに咲かせるのだ．サービス過剰ぎみに所内一面に咲かせるのはいささかげんなりする．朝夕は涼しくなるので鼬が下水溝から姿を現わす．デパートのウィンドに飾られているのとまったく同じのつやつやしたきつね色のスマートなやつだ．細長く身体の半分をしっぽが占めている．まったく，神さまは，彼に襟巻になるためのプロポーションを与えたのに違いない．まわりを見まわして出てきた下水溝にするすると帰っていく．彼は強度の近眼である．なぜなら約 2 米前にいる私に，全然気がつかないのだから．

昼間と夜間の温度差の大きいのもこの季節の特長であろう．その結果干渉計の導波管が熱的歪を受け，曲りの部分のバンク事故が多発する．その割目を見つけたそそっかしい蟻どもが，格好の冬ごもりの場所と突込んで，一族全員，卵までもって移り住んでしまう．

気づいた時は導波管の内面は蟻酸で腐蝕されてしまっている．秋も深くなるとおいしい自然薯が取れる．これは古来から栄養豊富で非常にキクものとされている．ここで重要な事は，これを掘り取るに要するであろうエネルギーと食べることによって得られるであろうエネルギーの損得勘定を慎重に行う必要がある．それは自然薯と平行して地面に垂直に小さな物で 60 センチ位，大物になれば，1 メートル 50 センチ以上の深さの直径 30 センチ位の穴をスコップで掘らなければならないからである．掘り上げたのを水で洗うと真白になる．八百屋で売ってる茶色の薄汚ないやつとは，まったく違うのだ．これで作ったとろろ汁の旨いこと，天下一品である．

このような自然環境の中で，文字通り，雨の日，風の日も，日曜，祭日関係なく 365 日，太陽の出ていない夜間以外は，5 人の観測要員で観測をつづけているのである．

学会だより

日本天文学会会員各位

春季総会において下記のよな申し合わせがなされましたので，この趣旨に沿って 7 月末までに新定款案に対する修正案を「三鷹市大沢，東京天文台内，日本天文学会」宛お寄せ下さるようお願いいたします．

1971 年 5 月 22 日

日本天文学会理事長　奥田豊三